KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

ある英語発音の認知度と指導法について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): 母音の長さ, clipping, 態度的機能, 挿入音 キーワード (En): 作成者: 山本, 晃司 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006066

関西外国語大学 研究論集 第99号（2014年３月）
Journal of Inquiry and Research, No.99（March 2014）

ある英語発音の認知度と指導法について

山　本　晃　司

要　旨

“leaf”と“leave”で使われる母音の長さは同じであるか、“mince”は/mɪns/それとも/mɪnts/か、Wh-で始まる疑問文は常に語尾を下げて読まなければいけないのか…。これらは学部生を対象に行った英語の発音に関するアンケート内容である。一見すると、いずれの質問も特に悩むことなく答えられるような内容である。実際、大半の学生は『同じである』、『/mɪns/である』、『語尾を下げる』と答えている。しかしながら、英語の発音は予想以上に複雑であり、母音の長さは音声環境によって変わり、/mɪns/は時に/mɪnts/と聞こえ、Wh-疑問文は語尾を上げて読むこともある。本稿では学生へのアンケート結果とともに、日本人英語学習者にはあまり知られていない英語の発音特徴を挙げ、その発音指導法などについても述べていきたい。

キーワード：母音の長さ、clipping、態度的機能、挿入音

はじめに

“leaf”–“leave”で使われる母音は同じ音質であるか、Wh-で始まる疑問文のイントネーションは必ず語尾を下げなければいけないのか、“mins”は常に/mɪns/であるのか。これらの問いに対する答えは全て“No”である。しかし、同様の質問を学部生に行うと、大半の学生から“Yes”という答えが返ってきた。本稿では学部生に行ったこれらの問いに関するアンケート結果を報告するとともに、その発音指導法についても述べていきたい。

１．学部生に行ったアンケート内容について

筆者が担当した平成25年度春学期の学部生（計106名）に行ったアンケートは a）母音の長さの違い、b）Wh-疑問文でのイントネーション、c）“mince”と“mints”の違い、である。

アンケート時間は10分間、辞書の参照も可能とした。c）では音声を流し、どちらの語が読まれているのかを答えてもらった。その際に使用した音源は*Oxford Advanced Learner's Dictionary*（以下、*OALD*）の第８版（2010）であり、British English版、いわゆるReceived Pronunciation

（以下、RP）を使っている。次節からは上記の順で話を進めていく。

2．母音の長さ[1)]

アンケートでは長母音（本稿では主に/i:/）を含んだ語を中心に選んでいる。数ある母音の中でも長母音が長さの違いを示しやすいためである。右枠の数字はチェックを入れた学生の数である。

a）下線部の母音の長さが違う組に✓をいれてください。

1．☐ bid - beat （96）
2．☐ live - leave （99）
3．☐ man - manage （10）
4．☐ bit - bid （6）
5．☐ mean - meaning （24）
6．☐ leaf – leave （3）
7．☐ see - seek （5）

大半の学生がチェックを入れているのは1（bid /bɪd/- beat /bi:t/）と2（live /lɪv/ - leave /li:v/）である。発音表記にもあるように、左側の語が短母音、右側の語が長母音であるので、ほぼ全員が正解となっている。一方、3－7に関しては、それぞれ/æ/, /ɪ/, /i:/という同じ母音が使われていることから、母音の長さに違いはないと判断したようである。しかし、3－7も全て母音の長さが違うのである。

3－7にチェックを入れている学生は、多くて5の24人である。つまり、多くの学生がこの事実を習っていない・知らないということになる[2)]。

同じ母音であっても長さが異なる要因は、その音声環境にある。英語では無声子音の前に母音が来るとその母音の長さが短くなる。これはpre-fortis clippingという現象で[3)]、たとえ/i:/などの長母音であっても無声子音の前ではその長さが減少する。実際、4（bit-bid）と6（leaf-leave）の“bit”と“leaf”は無声子音/t/と/f/の前に/ɪ/と/i:/が来ていることから母音の長さが短くなる。一方、“bid”と“leave”での母音はいずれも有声子音（/d/と/v/）の前に来ていることから母音本来の長さが保たれる。7の“see”に関しては語末に子音がない開音節となり（註3を参照）、この場合も有声子音と同様にその母音の長さが保たれる。一方、“seek”は無声子音があるので短い母音となる。

3と5に関しては、/æ/と/i:/に続いて有声子音/n/があることからそれぞれの母音の長さに違いはないはずである。しかし、“man”と“mean”の母音が本来の長さを保ち、“manage”と“meaning”は短くなる。これもclippingの一種で、rhythmic clippingという[4)]。同じ語内で

あっても、音節の数が増えるほど、その母音の長さは短くなるためである。“man”と“mean”は１音節であり、後者の語は２音節（/ˈmæn nɪdʒ/, /ˈmiːn ɪŋ/）であることから“man”と“mean”の母音はその本来の長さが保たれる。

上記の内容を口頭で、もしくは板書で説明することも重要ではあるが、ネット上で入手可能なフリーソフトの音声分析ソフト[5)]を使うと、音声的にも、視覚的にも明確に説明することができる。例えば、“leaf - leave”と“mean – meaning”をスペクトグラムで表示すると以下のようになる。矢印は該当する母音の長さを示している。

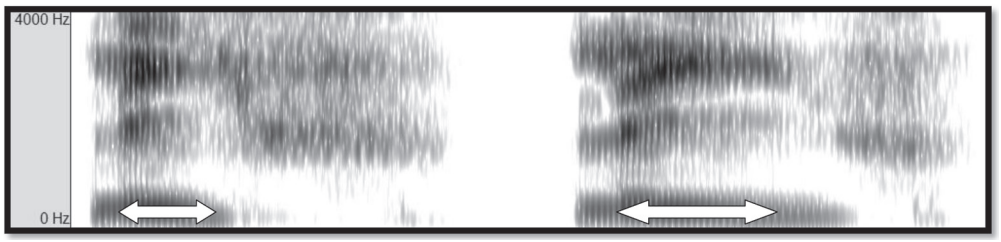


図１．Pre-fortis clipping:“leaf”（左）、“leave”（右）のスペクトグラム

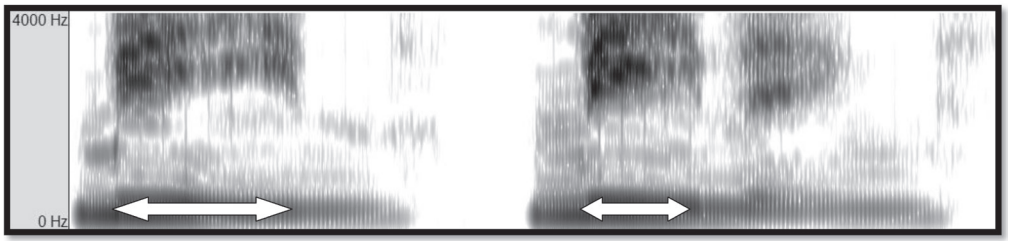


図２． Rhythmic-clipping:“mean”（左）、“meaning”（右）のスペクトグラム

上記のスペクトグラムは*OALD*に付属されているCD-Romから“leaf – leave”（男性話者）、“mean – meaning”（女性話者）を使っている。“leaf”の/iː/は13msであるのに対し、“leave”では25msとなっている。一方、“mean”は26msであるのに対し、“meaning”は17msとなっている。

３．イントネーションの機能

> “A foreigner who speaks a language with correct stressing and intonation but with incorrect sounds (within reasonable limits) will be better understood by natives than one whose sounds are correct but whose stressing and intonation are poor.”
>
> （Kingdon, 1958: xiii）

/æ/-/ʌ/、/r/-/l/の練習に膨大な時間をかけてきた日本人英語学習者は多いはずである。そういった人にとって、上記の引用文にあるように、個別音よりストレスやイントネーションの方が重要であるという見解に衝撃を受ける人がいるかもしれない。また、イントネーションと言えば、Yes-No疑問文は語尾を上げる、How-そしてWh-疑問文は語尾を下げると連想する人も多いのではないだろうか。実際、Wh-疑問文のイントネーションについて学生にアンケートを取ると以下のような結果となった。

b）“What is your name?”の語尾は上げますか、下げますか？その理由もお願いします。

下げる（84）

- ✓ Wh-疑問文は下げて読む・疑問詞がつくと下げると習ったから（21）
- ✓ Yes/Noで答えられないものは下げると習ったから（９）
- ✓ 語尾を下げて読んでいるのを聞いたことがある（４）
- ✓ 語尾を上げなくても疑問詞があるので下げる（３）
- ✓ 今まで語尾を上げて読んだことがないから（３）
- ✓ 語尾を上げると相手を疑っているように聞こえるから（１）
- ✓ 美しく聞こえるから（１）

上げる（22）

- ✓ 疑問文は語尾を上げるから（11）
- ✓ 質問している感じが出るから（２）
- ✓ 語尾を上げるように習ったから（２）
- ✓ よく耳にするから（２）
- ✓ 映画で聞いたことがあるから（１）
- ✓ 語尾を下げるのは違和感があるから（１）
- ✓ 丁寧に聞こえるから（１）
- ✓ 物腰が柔らかく聞こえるから（１）
- ✓ 聞きたい内容を強調したいから（１）

答えとしてはどちらも正解であるが、大半の学生が下げると答えている。また、その理由も「Wh-疑問文は下げて読む・疑問詞がつくと下げると習ったから」が多く挙がっている。一方、上げると答えた学生は少数である。このような大差はついたものの、下げる・上げるに見られる共通点は、文構造による判断が関わっているという点である。イントネーションにはこのような文法的機能もあるが、その機能は多岐にわたる[6)]。特に、重要な機能は“to express our attitudes and emotions.”（Wells, 2006: 11）であるという。例えば、

A: They’ve found a lovely car.
B: ① ↘Good. : ② ↗Good.

Bは下降調で“Good.”と答えてはいるものの、Bの態度（例えば、関心度）は①と②で大きく異なる。①と②の違いはそのピッチにあり、心から“Good.”と思っているのであれば①high-fall（上付きの斜線で表示）が使われるであろうし、特に関心がないのであれば②low fall（下付きの斜線で表示）が使われる。このように同じ語であってもその言い方次第では態度に大きな差が出るのである。

ただ、この態度的機能については“the most difficult area of intonation for foreign learners concerns its attitudinal uses”（Cruttenden, 2008[7]: 325）とも言われている。その理由として、Cruttenden（2008[7]: 283）はコンテクストによっては、たとえ丁寧と思われるイントネーションであっても、場合によっては失礼な印象を与えてしまうこともあるためとしている。場面によるイントネーションの瞬時の使い分けは難しいかもしれないが、いかに態度的機能が大きな役割をはたしているかは説明することができる。どのような時にどのようなイントネーションを使えばよいのかを説明するには、例えば、映画の１シーンを使うと便利である。

Doctor: Here we have a juvenile onset diabetic with poor circulation and diabetic neuropathy. As you can see, these are diabetic ulcers with lymphedema and evidence of gangrene. Questions?
Speaker A: Any osteomyelitis?
Doctor: None apparent. Although not definitive.
Speaker B: Treatment?
Doctor: To stabilize the blood sugar. Consider antibiotics, possibly amputation.
Patch: What's your name? I was just wondering the patient's name.
Doctor: Marjorie.
Patch: Hi, Marjorie.
Patient: Hi.
Doctor: Yes, um, thank you. Let's move on.

Patch Adams（1997）

上記は映画*Patch Adams*（1997）で“What's your name?”が使われるシーンである。患者の目の前で医師と研修生が大量の医学用語を使い診察を行っている。患者は理解不能な医学用語のため、病状が深刻なのかどうか判断できず、徐々に不安を募らせていく。その状況を打破するかのように、主人公であるパッチは“What's your name?”と聞くのである。その際のピッチの動きは以下のようになっている。点線はピッチの動きを示している。

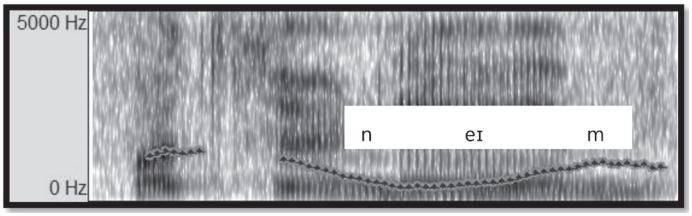


図３．“What's your name?”のピッチの動き

上記のスペクトグラムにあるピッチの動きをみると、“name”でピッチが上昇しているのが分かる。パッチは患者の名前を尋ねると同時にある効果を狙ってこのWh-疑問文に上昇調を使ったのである。Wells（2006: 43）によると、Wh-疑問文での上昇調は、例えば、“more gentle, kindly, encouraging, sympathetic or deferential”という響きを持たせることができるという。つまり、パッチは患者の不安を取り除くためにWh-疑問文で上昇調を使ったのである。

４．/-ns/子音群の発音

日本人英語学習者にとって“mince”,“tense”,“assistance”,“patience”を読むことに特別、大きな問題はないが、英語母語話者の場合、不思議な現象を伴った読み方となってしまうことがある。その現象とは、スペリング上にはない音の出現である[7)]。実際、音声学の訓練を受けていない学生にもわかるほどの現象であることがアンケート結果から読み取れる。アンケート時には以下の組を３回繰り返し流した。

c）聞き取った語に✓を入れてください。

☐ mince	（48）	☐ mints	（58）
☐ tense	（105）	☐ tents	（１）
☐ assistance	（10）	☐ assistants	（96）
☐ patience	（17）	☐ patients	（89）

実際に流したのは/-ns/で終わる左側の語のみであるが、“tense”を除き、/-nts/と聞き取った学生が多いことがわかる。特に後半の２語に関しては/-nts/にチェックを入れた学生が大半であった。/-ns/または/-nts/の違いはスペクトグラム上にもその違いが見えてくる。ここでは、105人が/-ns/と判断した“tense”、そして96人が/-nts/と判断した“assistance”のスペクトグラムを挙げておく[8)]。

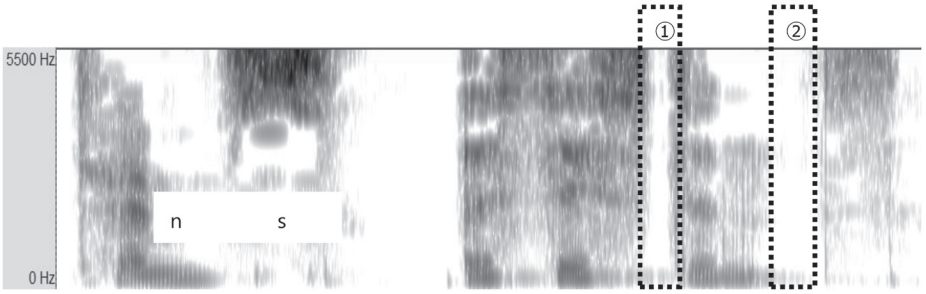


図４．“tense”（左）、“assistance”（右）のスペクトグラム

スペクトグラム上で破裂音は縦長に空白となって表示されるのが特徴である。図４の“assistance”では空白が２か所見られる。①は第２音節/ə ˈsɪst ənsにある破裂音/t/である。同様に、第３音節にも空白が/n/と/s/の間に見られる（②）。それに対して“tense”には/n/と/s/の間にその空白となる部分が見られない。そのため、大半の学生が/-ns/と判断したのである。

/n/と/s/の間に/t/となる文字がないにもかかわらず、それがあるように発音される（厳密には挿入される）ことをplosive epenthesisという。Cruttenden（2008[7]: 199）によると、/n/から/s/へと移行する際に、調音上でのタイミングにズレが生じることが原因であるとしている[9)]。この現象はかなり頻繁に起こるようであり、Cruttenden（2008[7]: 199）は/ns/と/nts/の使い分けをしているRP話者はほとんどいないとしている。また、アメリカ英語でも古くから見られ、Jones（1956[4]: 73）の*The Pronunciation of English*でも指摘されていることから、英米に関係なくこの現象が起こっているようである[10)]。

しかしながら、この現象については音声学テキストなどではあまり説明、言及されていない。また、英英辞書においてもこの挿入音/t/についての表記はない。発音辞典では、例えば、*Longman Pronunciation Dictionary*（2008[3]）（以下、*LPD*）では上付きの小文字で表示（/mɪnᵗs/）されているが、*LPD*（2008[3]: 567）ではこの現象は無視するようにとある[11)]。

/-ns/か/-nts/の違いでコミュニケーションに大きな支障をきたすわけではないが、一般的な英英辞書に収録されているCD-Romにおいても確認できることから、学生には真似するようにとは言わないまでも、知っておくべき現象として伝えるべきである。

おわりに

今回のアンケートに協力してもらった学部生は学年にばらつきがあるものの、アンケート結果からはこれら３つの特徴についての認知度が低いことがわかった。英語という言語について

の幅広い知識そして関心を持ってもらうためにもこれらの特徴を教えるべきである。その指導方法として、映画などの副教材を使った説明や本稿で使用したスペクトグラムも活用すべきである。また、学生が所有するパソコンの環境次第であるが、学生自身にもこのソフトを使ってもらい、母音の長さの違いなど確認してもらうと、より理解度を深めていくことになる。

註

1）*The Phonology of English as an International Language*の著者であるJenkins（2000）は外国人英語学習者が学ぶべき発音として音声環境による母音の長さの違いを挙げている。

2）辞書の発音表記にも原因がある。３－７を改めて発音表記に直してみると、3: mæn – mænɪdʒ, 4: bɪt – bɪd, 5: mi:n – mi:nɪŋ, 6: li:f – li:v, 7: si: – si:kとなる。これらの記号は英和辞書（研究社リーダーズ英和辞典（1999[2]））や英英辞書（*OALD*）そして発音辞典（*LPD*）においても同じ記号である。いずれの辞書にも特に母音の長さに違いがあることを示す記号は使われていない。アメリカ英語の辞書では長音を示す[:]という記号自体が使われていない。Lewis（2011）によると、これは単なる慣習の違いであるとしている。

3）Ladefoged and Johnson（2011[6]）は次のような定義をしている。

“Other things being equal, a given vowel is longest in an open syllable, next longest in a syllable closed by a voiced consonant, and shortest in a syllable closed by a voiceless consonant.”（*ibid*: 100）

4）次のように説明されている。

“Other things being equal, vowels are longest in monosyllabic words, next longest in words with two syllables, and shortest in words with more than two syllables.”

（Ladefoged and Johnson, 2011[6]: 101）

5）本稿で使用したソフトはPraat（http://www.fon.hum.uva.nl/praat/）である。

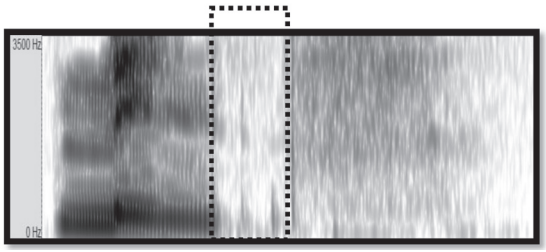
6）Wells（2006: 11-12）は以下のような機能を紹介している。

- The attitudinal function
- The grammatical function
- The focusing（also called accentual or informational）function
- The discourse（or cohesive）function
- The psychological function
- The indexical function

7）Jenkins（2000: 34）は英語母語話者は気付かぬうちに/t/の挿入を行っているとしている。実際、この現象が見られるあるアメリカ人教師に指摘すると、本人は全く気付いておらず、指摘されても納得いかない様子であった。

8）“mince”については/-ns/が48人、/-nts/が58人となった。この語のスペクトグラムを見るとその理由

が見えてくる。



/n/と/s/の間にわずかに破裂音を示す痕跡が見られる。音声で確認しても/-ns/とも/-nts/とも判断できる非常に難しい語となっており、そのため、このような拮抗する数となったと考えられる。

9）“This PLOSIVE EPENTHESIS, the insertion of /t/ between /n/ and /s/, results from the raising the soft palate before the oral closure for /n/ is relaxed for the fricative /s/.”（Cruttenden, 2008[7]: 199）

10）Jones（1956[4]）の*The Pronunciation of English*と同じ頃に出版されたアメリカ英語の発音辞典、*A Pronouncing Dictionary of American English* (Kenyon and Knott, 1953: xliv-xlv)では、挿入音の表記はなく、その言及もごくわずかである。

11）ロンドン大学で毎年開かれる夏季英語音声学講座がある。2013年に参加し、講座の最終日（８月23日）のQuestion Timeでこの挿入音/t/が音声学テキストではあまり言及されていないことについて質問すると、Reading大学のJane Setter教授から、英語母語話者は気付かぬうちに行っており、非英語母語話者が使うか使わないかは全く自由であるというお答えをいただいた。

言語資料

Patch Adams（1997）［*Universal Pictures*］

参考文献

Cruttenden, A. 2008[7]. *Gimson's Pronunciation of English*. London: Edward Arnold.

Jenkins, J. 2000. *The Phonology of English as an International Language*. Oxford: Oxford University Press.

Jones, D. 1956[4]. *The Pronunciation of English*. Cambridge: Cambridge University Press.

Kenyon, J.S. and Knott, T.A. 1953. *A Pronouncing Dictionary of American English*. USA: Merriam-Webster Inc.

Kingdon, R. 1958. *English Intonation Practice*. London: Longman.

Kreidler, C. W. 1989. *The Pronunciation of English*. Oxford: Blackwell.

Ladefoged, P. and Johnson, K. 2011[6]. *A Course in Phonetics*. Boston: Thomson Higher Education.

Lewis. J.W. 2011. "EFL etc Pronunciation Symbols (i)"
http://www.yek.me.uk/archive38.html#blog376 (Accessed: 5 March 2012)

Oxford Advanced Learner's Dictionary 2010[8]. Oxford: Oxford University Press.

Roach, P. *et al*. 2011[18]. *Cambridge English Pronouncing Dictionary*. Cambridge: Cambridge University Press.

Wells, J.C. 1982. *Accents of English*. Volume 1. Cambridge: Cambridge University Press.

Wells, J.C. 2006. *English Intonation*. Cambridge: Cambridge University Press.

Wells, J.C. 2008[3]. *Longman Pronunciation Dictionary*. Harlow: Longman.

（やまもと・こうじ　外国語学部講師）